

新人大会総評

～成徳深谷初優勝。新たな覇者の誕生～

報告者：高体連技術委員 埼玉県立上尾鷹の台高校 塚本 卓司

平成30年2月10日・12日・17日・18日の4日間の日程で、平成29年度埼玉県高校サッカー新人大会が開催された。昨年開催された選手権予選においてベスト8の成績を残したチームと各地区大会を勝ち抜いた8チームの計16チームが参加した。

今大会は昨年、県内4つの大会（新人大会、関東予選、総体予選、選手権予選）とSリーグ全て制し、全国高校総体や全国高校サッカー選手権に出場した昌平、また昨年33年ぶりに全国高校総体に出場し、選手権予選では決勝に進出した浦和西が敗退するなど混沌とした大会であった。こうした中、大会を制したのがその昌平を破った成徳深谷であった。就任14年目の為谷監督が悲願の初優勝を手にした。

成徳深谷の特徴は強固な守備。そして、主な得点源となっているセットプレー。降雪の影響で地区予選が延期となり、2月6日、8日と試合を行った後、10日からの県大会に臨んだ。この2週間で6試合を戦い体力的なハンデは大きかった。しかし、体力的なハンデはものともせず、整った守備は失点しても崩れることはなかった。1-4-2-3-1のシステムで3ラインをコンパクトに保ち、ブロックを整え、⑮戸澤が献身的に走り、相手の攻撃方向を限定し、それに連動して高い位置からボールを奪いにいく。選手同士の距離も良く、カバーの意識も良かった。④成澤を中心とした守備陣は中央を締め強固な守備を作り上げていった。また、奪いに行くところ、慌てず相手の攻撃を遅らせて守備を整えてからボールを奪いに行くなど、チームとして奪う意識を統一し、安定した守備を展開した。攻守の切り替えも早く、1対1の場面でも球際の強さが目立っていた。攻撃もバリエーション豊かなCKや⑲長谷のロングスローは相手チームを大いに脅かしていた。実際に得点の多くはCKやロングスローからであった。しかし、安易にサイドに蹴り出してCKやスローインを取りに行くのではなく、DFラインからビルドアップを行い、⑩北原を起点に攻撃を組み立てていた。途中出場の⑪間中はテクニックがあり、サイドからのドリブルで攻撃にアクセントをつけていた。決勝でもゴールへ向かうドリブルからPKを誘い、同点へのきっかけを作った。

準優勝した、西武台は1-4-1-4-1のシステムで、サイドからの攻撃が特徴であった。1トップ⑨関口はボールキープ力が高く、中央に相手を寄せ、そこからサイドに展開したり、DFからのビルドアップからサイドにボールを運び、少ないタッチのパスから相手DFラインの背後を取り、サイドを崩していた。両サイドは高い位置にポジションを取り、テクニックのある⑦深代や⑩若谷の突破からチャンスを作り出した。両サイドハーフが高い位置を取っているため、サイドバックとの距離が開いてしまい、そこを相手選手に使われる場面があったので、今後の課題と考えられる。

浦和東は1-4-4-2と1-4-1-4-1のシステムを採用していた。昨年から出

場している⑨小川の高さを生かし、その裏のスペースを狙いMFが走りこむことやビルドアップからサイドへボールを供給し、そこから攻撃を展開していた。守備ではボールへの寄せが早く、球際の強さもあり、相手の自由を奪っていた。④上原は高さもあり、フィジカルも強いのが特徴的であった。

武南は、1-4-1-4-1のシステムでサイドからの攻撃が特徴であった。⑦渡辺、⑪宮下は非常に技術も高く、突破からサイドを打開し中央へ効果的なクロスを供給していた。GKは出場した2人の選手は共に大型で、体の大きさを生かしたシュートストップや間合いを詰めたシュートブロックなど他のチームには無い特徴があった。

2回戦で敗退したが、前大会の覇者、昌平は、システムを1-4-5-1から1-3-4-2-1に変更したが、ゲーム中に1-4-5-1に戻すなど試行錯誤が続いている様子が見られた。昨年から出場している選手も多く、今後の大会で徐々に整っていくことが考えられる。同じく、2回戦での敗退となったが、昨年33年ぶりに全国総体に出場した浦和西は昨年のチームでも出場している⑨森や⑩唐牛、⑭石山など攻撃陣に好素材がおり、今後も楽しみである。また、正智深谷も⑨田中のキープ力の高さやDFラインの背後へのタイミングの良い飛び出しは際立っていた。⑪オナイウも非常にスピードがあり縦への突破はとても魅力的であった。

今大会を見て感じたことは組織的な守備の構築である。多くのチームは攻守の切り替えやプレッシャーの早さがあった。前向きの守備も強さがあり、奪うことができていた。そうした個での対応はよくできている。ファーストディフェンダーの動きに連動してポジションを取る。1人抜かれても、良い距離感を保ちカバーリングを行う。奪いに行くだけではなく、守備が整っていなければ無理に奪いに行かず規制する。ゴールに簡単に侵入されないよう中央を閉じる。攻撃時からリスクマネージメントを考えておく。このような点を整理していたのが成徳深谷の守備であった。今後は各チーム独自の攻撃スタイルにより成徳深谷の守備を打開しようとするのが考えられるが、さらに洗練された守備が対抗し、それを攻撃が上回る。このように切磋琢磨しながら県内のレベルが向上していくのが楽しみである。